用例抽出資料

作品は，著者名，著者生年，作品名，作品の出版年の順に示し，著者生年順に挙げる。当該作品名を，本研究の用例に付する際に略称で示した場合は，その略称を墨付き括弧内に示す。

小説の会話文テクスト

1）CD-ROM版新潮文庫の 100 冊より [280]

- 竹山道雄（1903 生）『ビルマの竪琴』(1947)
- 山本周五郎（1903 生）『さぶ 1』(1963)【さぶ】
- 石川達三(1905 生)『青春の蹉跌』(1968)
- 井上 靖（1907 生）『あすなろ物語』(1953)【あすなろ】
- 松本清張（1909 生）『点と線』(1957)
- 大岡昇平(1909 生)『野火』(1951)
- 太宰 治(1909 生)『人間失格』(1948)
- 福永武彦(1918 生)『草の花』(1954)
- 水上勉（1919)『越前竹人形・雁の寺』(「越前竹人形」「雁の寺」所収）(1961)
- 吉行淳之介（1924 生)『砂の上の植物群』(「砂の上の植物群」「樹々は緑か」所収）(1964)【植物群】
- 三島由紀夫(1925 生)『金閣寺』(1956)
- 立原正秋(1926 生)『冬の旅』(1969)
- 北 杜夫（1927 生)『楡家の人びと』(1964)【楡家】
- 開高 健（1930 生)『パニック・裸の王様』(「パニック」「巨人と玩具」「裸の王様」「流亡記」所収）(1957)
- 三浦哲郎（1931 生)『忍ぶ川』(「帰郷」「幻燈畫集」「初夜」「恥の譜」「忍ぶ川」「團欒」「驢馬」所収）(1960)
- 有吉佐和子(1931 生)『華岡青洲の妻』(1966)
- 渡辺淳一(1933 生)『花埋み』(1970)
- 井上ひさし(1934 生)『ブンとフン』(1970)
- 筒井康隆（1934 生)『エディプスの恋人』(1981)【エディプス】
- 大江健三郎(1935 生)『死者の奢り・飼育』(「死者の奢り」「飼育」「人間の羊」「戦いの今日」「他人の足」「不意の唖」所収）(1957)
- 倉橋由美子(1935 生)『聖少女』(1965)
- 椎名 誠(1944 生)『新橋烏森口青春編』(1985)【新橋烏森口】
- 沢木耕太郎(1947 生)『一瞬の夏』(1981)

2）シナリオ

- 山田洋次(1931 生)･朝間義隆「シナリオ たそがれ清兵衛」2003 年月刊『シナリオ』1 シナリオ作

[280] このうち，椎名 誠『新橋烏森口青春編』(1985)のみエッセイである。

家協会【たそがれ清兵衛】
- 村上 修（1951 生）『1000 マイルも離れて・さわこの恋』1995 年月刊『シナリオ』6 シナリオ作家協会【1000 マイル】
- 伴 一彦（1954 生）『砂の上の恋人たち』1999 年 関西テレビ http://www.plala.or.jp/ban/

3）手作業による収集
- 林真理子（1954 生）『胡桃の家』（「胡桃の家」「玉呑み人形」「女友だち」「シガレット・ライフ」所収）（1986）新潮社 【シガレット】
- 森 瑤子（1940 生）『結婚式』（1985）新潮社
- 宮本 輝（1947 生）『ドナウの旅人（上巻）』（1985）新潮社 【ドナウ】
- 辻 仁成（1959 生）『冷静と情熱のあいだ Blue』（1999）角川書店 【冷静と情熱】
- 鷺沢 萌（1968 生）『帰れぬ人びと』（1989 雑誌『文学界』文芸春秋・初出）

小説の地の文テクスト：著者生年順

CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊より
- 井上 靖（1907 生）『あすなろ物語』（1953）【あすなろ.地】
- 松本清張（1909 生）『点と線』（1957）【点と線.地】
- 山本周五郎（1903 生）『さぶ 1』（1963）【さぶ.地】
- 吉行淳之介（1924 生）『砂の上の植物群』（1964）【植物群.地】
- 北 杜夫（1927 生）『楡家の人びと』（1964）【楡家.地】
- 開高 健（1930 生）『裸の王様』（1957）【裸の王様.地】
- 有吉佐和子（1931 生）『華岡青洲の妻』（1966）【華岡青洲.地】
- 渡辺淳一（1933 生）『花埋み』（1970）【花埋み.地】
- 井上ひさし（1934 生）『ブンとフン』（1970）【ブンとフン.地】

《追加データ》（☆をつけた統計の対象外の作品，上記作品についても，101 例以降の用例は統計の対象としていないため，☆をつけている）
- 井伏鱒二（1898 生）『黒い雨』（1965）6
- 竹山道雄（1903 生）『ビルマの竪琴』（1947）
- 山本周五郎（1903 生）『さぶ 1』（1963）【さぶ】
- 石川達三（1905 生）『青春の蹉跌』（1968）
- 大岡昇平（1909 生）『野火』（1951）
- 太宰 治（1909 生）『人間失格』（1948）
- 新田次郎（1912 生）『孤高の人』（1969）
- 福永武彦（1918 生）『草の花』（1954）
- 水上勉（1919）『越前竹人形・雁の寺』（「越前竹人形」「雁の寺」所収）（1961）
- 阿川弘之（1920 生）『山本五十六』（1920）
- 三浦綾子（1922 生）『塩狩峠』（1968）
- 池波正太郎（1923 生）『剣客商売』（1972）
- 安部公房（1924 生）『砂の女』（1962）
- 三島由紀夫（1925 生）『金閣寺』（1956）
- 立原正秋（1926 生）『冬の旅』（1969）

- 吉村 昭（1927 生）『戦艦武蔵』(1966)
- 開高 健（1930 生）『パニック・裸の王様』(「パニック」「巨人と玩具」「流亡記」) (1957)
- 野坂昭如（1930 生）『アメリカひじき・火垂るの墓』(「アメリカひじき」「プアボーイ」「ラ・クンバルシータ」「火垂るの墓」「死児を育てる」「焼土層」所収)
- 曽野綾子(1931 生)『太郎物語』(1978)
- 三浦哲郎（1931 生）『忍ぶ川』(「帰郷」「幻燈畫集」「初夜」「恥の譜」「忍ぶ川」「團欒」「驢馬」所収) (1960)
- 筒井康隆（1934 生）『エディプスの恋人』(1981)【エディプス】
- 大江健三郎(1935 生)『死者の奢り・飼育』(「死者の奢り」「飼育」「人間の羊」「戦いの今日」「他人の足」「不意の唖」所収) (1957)
- 倉橋由美子(1935 生)『聖少女』(1965)
- 椎名 誠(1944 生)『新橋烏森口青春編』(1985)【新橋烏森口】
- 沢木耕太郎(1947 生)『一瞬の夏』(1981)
- 村上春樹（1949 生）『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』

評論文テクスト

日本語教育支援システム研究会（CASTEL/J）CD-ROM より，すべて講談社刊行

- 今津 晃著(1917 生)『二十世紀の世界』(1974)【二十世紀】
- 米山正信(1918 生)『化学とんち問答――休さんに挑戦！』(1991)【化学】
- 千葉康則著(1925 生)『記憶の大脳生理学―もの憶えをよくするために』(1991)【記憶】
- 中根千枝著(1926 生)『タテ社会の人間関係―単一社会の理論』(1967)【タテ社会】
- 河野友美著(1929 生)『たべものと日本人』(1975)【たべもの】
- 飯田経夫著(1932 生)『「ゆとり」とは何か―成熟社会を生きる』(1982)【ゆとり】

《追加データ》（☆をつけた統計の対象外の作品，上記作品についても，115 例以降の用例は統計の対象としていないため，☆をつけている）

- 会田雄次(1916 生)『日本人の意識構造』(1972)
- 吉野裕子(1916 生)『日本人の死生観』(1982)
- 野元菊雄(1922 生)『敬語を使いこなす』(1987)
- 都筑卓司(1928 生)『時間の不思議』(1991)
- 加藤秀俊(1930 生)『パチンコと日本人』(1984)
- 鷹羽狩行(1930 生)『俳句のたのしさ』(1976)
- 山田雄一(1930 生)『稟議と根回し』(1985)
- 山折哲雄(1931 生)『神と仏』(1983)
- 黒井千次(1932 生)『働くということ』(1982)
- 品川嘉也(1932 生)『全能型勉強法の進め』(1987)
- 中村希明(1932 生)『酒飲みの心理学』(1990)
- 中村希明(1932 生)『犯罪の心理学』(1990)
- 吉岡郁夫(1932 生)『人体の不思議』(1986)
- 飛鳥井雅道(1934 生)『近代の潮流』(1976)
- 中原秀臣・佐川峻(1945 生・1944 生)『進化論が変わる』(1991)
- 井上忠司(生年不詳)『まなざしの人間関係』(1982)

・ 平野仁啓（生年不詳）『日本の神々』(1985)
・ 吉田寿三郎(生年不詳)『高齢化社会』(1981)

新聞テクスト

『CD―毎日新聞 2000 データ集』

参考文献

青木博史　1996「可能動詞の成立について」『語文研究』81 号（九州大学）：1-12.

天野みどり　2001「無生物主語のニ受身文―意味的関係の想定が必要な文」『国語学』52 巻 2 号：1-15.

天野みどり　2002『文の理解と意味の創造』笠間書院.

井島正博　1988「受身文の多層的分析」『防衛大学校紀要』第 57 輯 人文科学分冊：71-103.

石綿敏雄　1990「第 3 章 文法 (8)ヴォイス」石綿敏雄・高田 誠共著『対象言語学』おうふう：59-68.

井上和子　1972a「変形文法と日本語その 4」『英語教育』20 巻 11 号：70-74.

井上和子　1972b「変形文法と日本語その 5」『英語教育』20 巻 12 号：70-75.

井上和子　1976『変形文法と日本語 上』大修館書店.

井上知子　1996「日本語の受身文について」『英語文化研究』12 独協大：69-94.

尹 鎬淑　1996「受身文における動作主のマーカーについて―近代の小説を中心として―」中国四国教育学会 『教育学研究紀要』第 41 巻 2 部：415-420.

大江三郎　1975『日英語の比較研究―主観性をめぐって』南雲堂.

岡田正美　1900『日本文法文章法大要』吉川半七（復刻：北原保雄・古田東朔(編)『日本文法研究書大成』第 8 回 勉誠社 2001）

岡部嘉幸（近刊）「いわゆる『非情の受身』の諸類型」尾上圭介(編)（近刊）

興津憲作　1969「イスパニア語と日本語の比較研究Ⅱ 受動態」『サピエンチア』3 英知大学：61-80.

奥田靖雄　1960「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会(編)『日本語文法・連語論（資料編）』（1983 発行） むぎ書房.

奥田靖雄　1968-72「を格の名詞と動詞のくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28 号（再録：言語学研究会編 1983，本稿のページ数はこの 1983 を採用）

奥田靖雄　1976「言語の単位としての連語」『教育国語』45：2-13（再録：奥田 1996）

奥田靖雄　1979「意味と機能」『教育国語』58（再録：奥田 1996，本稿のページ数はこの 1996 を採用）

奥田靖雄　1980-1981「言語の体系性」『教育国語』63, 64, 65, 66 号（再録：奥田 1996，本稿のページ数はこの 1996 を採用）

奥田靖雄　1983『日本語文法・連語論（資料編）』言語学研究会(編) むぎ書房.

奥田靖雄　1986「現実・可能・必然（上）」言語学研究会(編)『ことばの科学』むぎ書房：181-212.

奥田靖雄　1988「時間の表現(1)(2)」『教育国語』94，95：2-17，29-41.

奥田靖雄　1993「動詞の終止形（その 1）」『教育国語』2-9：44-53.

奥田靖雄　1994「動詞の終止形（その 2）」『教育国語』2-12：27-42.

奥田靖雄　1996『ことばの研究・序説』むぎ書房.

奥津敬一郎　1983「何故受身か？―＜視点＞からのケース・スタディ―」『国語学』132：65-80.

奥津敬一郎　1985「日本語と英語の受身文―『坊ちゃん』の分析―」『日本語学』4 巻 7 号 明

治書院：105-115.
奥津敬一郎　1992「日本語の受身文と視点」『日本語学』11 巻 9 号 明治書院：4-11.
尾上圭介　1998a「文法を考える 5 出来文(1)」『日本語学』17 巻 7 号 明治書院：76-83.
尾上圭介　1998b「文法を考える 6 出来文(2)」『日本語学』17 巻 10 号 明治書院：90-97.
尾上圭介　1999「文法を考える 7 出来文(3)」『日本語学』18 巻 1 号 明治書院：86-93.
尾上圭介　2002a「コトの出来する場としての自己」文法学研究会 第 4 回集中講義資料（8 月 3･4 日）
尾上圭介　2002b「ラレル文の多義性の構造と主語」文法学研究会連続公開講義第 4 回講義資料（9 月 7 日）
尾上圭介　2003「ラレル文の多義性と主語」『月刊言語』Vol.32- No.4：34-41.
尾上圭介(編)（近刊）『ラレル文の研究』くろしお出版（未読）.
影山太郎　1996『動詞意味論』くろしお出版.
影山太郎　2000「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好(編)『日英後の自他の交代』ひつじ書房：33-70.
影山太郎(編)　2001『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
金沢庄三郎　1912『日本文法新論』早稲田大学出版部.
神尾昭雄　1985「談話における視点」『日本語学』4 巻 12 号：10-21.
辛島美絵　1993「『る・らる』の尊敬用法の発生と展開―古文書他の用例から―」『国語学』127：1-14，61.
河上誓作他訳　2001『Adele E. Goldberg 著 構文文法論―英語構文への認知的アプローチ』研究社出版
川端善明　1958「形容詞文」『国語国文』27 巻 12 号：1-11.
川端善明　1976「用言」『岩波講座 日本語 6 文法 I』岩波書店：169-217.
川端善明　1978「形容詞文･動詞文概念と文法範疇」阪倉篤義監修『論集日本文学・日本語 5 現代』角川書店：186-207.
川村 大　1993「ラル形式の機能と用法」『国語研究』(松村明先生喜寿記念会編) 明治書院：714-730.
川村 大　2002「受身文の学説史――意味から見た下位分類をめぐる議論を中心に――」文法学研究会連続公開講義第 2 回講義資料.
川村 大　2003「受身文の学説史から―被影響の有無をめぐる議論について」『月刊言語』Vol.32-No.4：42-49.
川村 大　2004「受身・自発・可能・尊敬―動詞ラレル形の世界―」尾上圭介(編)『朝倉日本語講座 文法 II』朝倉書店：105-127.
川村 大（近刊）「受身文をめぐる学説史―受身の「意味」を問う観点から―」尾上圭介(編)『ラレル文の研究』くろしお出版.
木下正俊　1972『萬葉集語法の研究』塙書房.
金 英南　2005「日本語のラレテイルについて」東京外国語大学修士論文.
金水 敏　1990「述語の意味層と叙述の立場」『女子大文学 国文篇』第四十一号：26-56.
金水 敏　1991「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164 集：1-14.
金水 敏　1992a「場面と視点―受身文を中心に」『日本語学』11 巻 9 号：12-19.
金水 敏　1992b「欧文翻訳と受動文―江戸時代を中心に―」文化言語学編集委員会(編)『文化言語学―その提言と建設―』三省堂：547-562.

金水 敏　1993「受動文の固有・非固有性について」近代語研究 第九集 武蔵野書院:473-508
金水 敏　1995「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古稀記念国語学論集』築島裕博士古稀記念会編 汲古書院：169-197.
金水 敏　2002「日本語の受動文および関連する現象」日本言語学会夏期講座 日本語文法上級 講義資料.
金水 敏　2003a「ラ抜き言葉の歴史的研究」『月刊言語』Vol.32-No.4：56-62.
金水 敏　2003b「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」『統合化された言語学・国語学用語集のための基礎的研究』平成 14 年度 科学研究費 基盤研究 (C)(2) 研究成果報告書，課題番号：14510618，研究代表者 金水敏：27-35.
金田一春彦　1957「時・態・相および法」『日本語文法講座 1 総論』明治書院.
釘貫 亨　1991「助動詞「る・らる」「す・さす」成立の歴史的条件について」『国語学』164 集：15-28.
釘貫 亨　2003「奈良時代語の述語状態化標識として成立したリ，タリ，ナリ」『国語学』54 巻 4 号：81-93.
工藤 浩　1985「日本語の文の時間表現」『言語生活』403:48-56.
工藤 浩　1989a「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39:14-33.
工藤 浩　1989b「文法—記号がないことの意味—」『月間言語』18-5:46-47.
工藤 浩　1996「「どうしても」考」鈴木泰・角田太作(編)『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』ひつじ書房.
工藤 浩　2000「第 3 章 副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店：161-234.
工藤真由美　1990「現代日本語の受動文」『ことばの科学 4』むぎ書房：47-102.
工藤真由美　1991「アスペクトとヴォイス」鈴木重幸他 科学研究費報告書『現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイスについての総合的研究』: 5-39.
工藤真由美　1995『アスペクト・テンス体系とテクスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房.
久野 暲　1978『談話の文法』大修館書店.
久野 暲　1983『新日本文法研究』大修館書店.
久野 暲　1986「受身文の意味—黒田説の再批判」『日本語学』5 巻 2 号 明治書院：70-87.
黒田成幸　1985「受身についての久野説を改釈する——一つの反批判—」『日本語学』4 巻 10 号 明治書院：69-77.
国立国語研究所　1951『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版.
小杉商一　1979「非情の受身について」『田辺博士古希記念助詞助動詞論叢』桜楓社:473-488.
此島正年　1973『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社.
近藤泰弘　2000『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
近藤 豊　1992「西日受身表現について—Ser＋過去分詞」天理大学学報 171：65-82.
佐伯哲夫　1987「受動動作主マーカー考 (上)(下)」『日本語学』6 巻 1・2 号：100-106, 97-105.
坂原 茂　2002「ヴォイス現象の概観」文法学研究会 2002 年度連続公開講義 第 1 回講義資料.
坂原 茂　2003「ヴォイス現象の概観」『月刊言語』Vol.32- No.4：26-33.
佐久間鼎　1936『現代日本語の表現と語法』(初版) 厚生閣.
佐久間鼎　1951『現代日本語の表現と語法』(改訂版) 恒星社厚生閣 (補正版:1966, 同復刻:

くろしお出版 1983)
桜井光昭　1966『今昔物語集の語法の研究』明治書院.
定延利之　1996「遠近の言語学」『月間言語』25-5：24-27.
志波彩子　1999『スペイン語における再帰動詞の自動詞化について—日本語の有対動詞の意味特徴をヒントに—』東京外国語大学卒業論文.
志波彩子　2003「日西受身表現の意味機能（1）—主語と動作主の現れ方をめぐって—」スペイン語学研究 18：61-85.
志波彩子 2004「現代日本語の受身文の意味・機能—受影性と自然性—」東京外国語大学大学院修士論文.
志波彩子 2005「2つの受身 —被動者主役化と脱他動化—」『日本語文法』5-2：196-212.
志波彩子 2006「会話文テクストにおける受身文の行為者の現れ方について—構造的タイプとの関係で—」『東京外国語大学日本研究教育年報 10』：1-24.
柴谷方良　1978『日本語の分析』大修館書店.
柴谷方良　1997a「迷惑受身の意味論」川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房：1-22.
柴谷方良　1997b「言語の機能と構造と類型」『言語研究』112 号：1-32.
柴谷方良　2000「ヴォイス」『日本語の文法 I 文の骨格』岩波書店：119-186.
渋谷勝己　1993「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要第 33 巻 第 1 分冊』.
清水慶子　1980「非情の受身の一考察」『成蹊国文』 第十四号：46-52.
新村 出　1943『言語学序説』星野書店.
須賀一好・早津恵美子(編)　1995『動詞の自他』ひつじ書房.
杉岡洋子　2002「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」 伊藤たかね(編)『文法理論：レキシコンと統語（シリーズ言語科学第 1 巻)』東京大学出版会 91-116.
杉本 武　1999「「雨に降られる」再考」『文藝言語研究. 言語篇』：49-62..
鈴木重幸　1972『日本語文法・形態論』むぎ書房.
鈴木康之　2004「奥田靖雄の連語論」『国文学解釈と鑑賞』69 巻 1 号：152-161.
須田義治　2005「連語論と動詞の意味的な分類」『国文学解釈と鑑賞』70 巻 7 号：121-129.
砂川有里子　1984a「「ニ」と「カラ」の交替と動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』12 号 大阪外国語大学研究留学生別科：71-87)
砂川有里子　1984b「〈に受身文〉と〈によって受身文〉」『日本語学』3 巻 7 号：76-87.
高垣敏博　1999a「〈estar+過去分詞〉と〈テイル文〉—結果相解釈をめぐって」『日本語とスペイン語(3)』国立国語研究所：67-93.
高垣敏博 1999b「研究ノート 語彙アスペクトとスペイン語の迂言的受動文—De Miguel(1992)第 4 章から—」『言語研究IX』東京外国語大学：97-107.
高瀬匡雄　2004「奥田靖雄の言語理論 文献の紹介を中心に」『国文学解釈と鑑賞』69 巻 1 号：142-151.
高橋太郎　1975「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103 集：1-17.
高橋太郎　1985「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4 巻 4 号：4-23.
高見健一　1995『機能構文論による日英語比較——受身文，後置文の分析』くろしお出版.
高見健一・久野 暲　2000「日本語の被害受身文と非能格性 上・中・下」『月間言語』Vol.29, No.8-10：80-91，80-94，70-88.
高見亮子　1996「室町時代受身文の動作主マーカー」御茶ノ水女子大学 『国文』85：73-82.

竹沢幸一　1991「受動文，能格文，分離不可能所有構文と「ている」の解釈」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版.

茶谷恭代　2003「現代日本語の副詞の研究―「よほど」の意味と用法について―」東京外国語大学大学院修士論文.

茶谷恭代　2005「副詞「よほど」の意味と用法」東京外国語大学『言語・地域文化研究』第11号:103-124.

張 麟声　1997「受動文における動作主明示･不明示･の構文的規則について」『日本語学』16巻2号：70-78.

鄭 聖汝　2004「韓国語の自動詞とヴォイス―自発と受身の連続性―」影山太郎・岸本秀樹（編）『日本語の分析と言語類型』くろしお出版.

角田太作　1991『世界の言語と日本語』くろしお出版.

辻 幸夫編　2002『認知言語学キーワード事典』研究社.

坪井栄治郎　2002a「受影性と受身」『シリーズ認知言語学 2 認知言語学Ⅰ:事象構造』西村義樹(編)　東京大学出版会：63-86.

坪井栄治郎　2002b「力動性（force dynamics)」（p251）辻 幸夫(編)2002.

坪井栄治郎　2003a「受影性と他動性」文法学研究会 2002年度連続公開講義 第8回講義資料（1月11日）

坪井栄治郎　2003b「受影性と他動性」『月刊言語』Vol.32-No.4：50-55.

出口厚実　1982「スペイン語―再帰形式をめぐって―」寺村秀夫他(編)『講座日本語学 10 外国語との対照Ⅰ』明治書院：305-318.

出口厚実　1983「再帰文のパタンと分類基準―再帰構造論(3)」*Estudios Hispánicos* 9：1-15

出口厚実　1995「表現 12 非人称」山田善朗編『中級スペイン文法』白水社：530-535.

出口厚実　1997『スペイン語学入門』大学書林.

寺崎英樹　1999「日本語と対比したスペイン語の受動表現」『東京外国語大学百周年記念論文集』東京外国語大学：59-76.

寺村秀夫　1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.

東郷雄二　1994「受動態と非人称の transitivity system―日仏対照研究へ向けて―」日仏語対照研究会編『日仏語対照研究論集』、平成4-5年度日仏会館・石橋財団研究補助金による研究成果報告書：http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/passive.html.

中島悦子　1988「『万葉集』における「非情の受身」」日本女子大学大学院の会『会誌』7：1-11.

永野 賢　1951『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞―用法と実例』秀英出版.

西川 喬　1985「スペイン語における ser 受動態使用制限について」『ロマンス語研究』18.

西川 喬　1995「表現 14 受動態」山田善朗編『中級スペイン文法』白水社：540-547.

仁田義雄　1982「再帰動詞，再帰用法―Lecxico-Syntax の姿勢から―」『日本語教育』47号：79-90.

仁田義雄　1991「ヴォイス的表現と自己制御性」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版.

野田尚史　1997 「日本語とスペイン語のボイス」『日本語とスペイン語(2)―日本語と外国語の対照研究Ⅴ』　国立国語研究所：83-113.

野村剛史　1982「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』11 大阪外国語大学留学生別科・日本語学科（再録：須賀・早津(編)1995，137-150）

野村剛史　1990「ボイス」『日本語学』9巻10号：69-73.
野村剛史　1994「上代語のリ・タリについて」『国語国文』第63巻1号：28-50.
野村剛史　2003「存在の様態——シテイルについて——」『国語国文』第72巻9号：1-20.
橋本進吉　1969『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
早瀬尚子　2002『英語構文のカテゴリー形成　認知言語学の視点から（大阪外国語大学言語社会研究叢書第2輯）』勁草書房.
早津恵美子　1987a『他動詞と自動詞の対応について』東京外国語大学大学院外国語学研究科修士論文.
早津恵美子　1987b「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特長」『言語学研究』6号 京都大学言語学研究会：79-109.
早津恵美子　1990「有対他動詞の受身表現について——無対他動詞の受身表現との比較を中心に——」『日本語学』9巻5号：67-83.
早津恵美子　2000「現代日本語のヴォイスをめぐって」『日本語学』19巻5号：16-27.
早津恵美子　2004「動詞分類と動詞文のタイプ」『国文学解釈と鑑賞』69巻1号：84-98.
早津恵美子　2008「人名詞と動詞とのくみあわせ（試論）—連語のタイプとその体系—」『語学研究所論集』第13号 東京外国語大学：43-76.
原田信一　1974「中古受身文についての一考察」『文学・語学』74（再録：原田信一著・福井直樹編 2000『シンタクスと意味——原田信一言語学論文選集』大修館書店：516-527）
春木仁孝　2002「フランス語の再帰構文　その認知的一体性」西村義樹(偏)『認知言語学Ⅰ：事象構造』：37-62. 東京：東京大学出版会.
福嶌教隆　1990「スペイン語と日本語—間接影響表現の対照—」近藤達夫編『講座日本語と日本語教育12 言語学要説（下）』明治書院：197-218.
福村虎治郎　1965『英語態(Voice)の研究』北星堂書店.
裵 銀貞　2003「所有物主語の受身文における視点違反の判断と出現様相について」国語学会2003年度春季大会発表.
ヘルビヒ，G. 1970『近代言語学史—とくに文法理論を中心に—』岩崎英二郎他訳 1973年，白水社（原著は Gerhard Helbig. 1970 *Geschichte der Neueren Sprachwissenschaft — Unter dem besonderen Aspekt der Grammatik Theorie* —, Leipzig, VEB Bibliographisches Institut.
細江逸記　1928「我が国語の相(Voice)を論じ，動詞の活用形式の分岐するにいたりし原理の一端に及ぶ」市河三喜編『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀會：96-130.
細川由起子　1986「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」『国語学』144集：113-124.
許 明子　2004『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房.
堀口和吉　1982「日本語の受身表現」『日本語・日本文化』11号 大阪外国語大学研究留学生別科：65-89.
堀口和吉　1990「競合の受身」山辺道34：31-40.
堀 重彰　1941『日本語の構造』畝傍書房.
益岡隆志　1982「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82：48-64（再録：「受動表現の意味分析」益岡 1987）
益岡隆志　1987『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版.

益岡隆志　1991a「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版：105-121.

益岡隆志　1991b『モダリティの文法』くろしお出版.

益岡隆志　2000「第5章 叙述の類型から見た受動文」『日本語文法の諸相』くろしお出版：55-69.

松下大三郎　1928『改撰標準日本文法』紀元社（訂正版：中文館書店 1930，同復刻：徳田政信編『改撰標準日本文法』勉誠社 1974，同訂正再版：1978）

松下大三郎　1930『標準日本口語法』中文館書店（復刻：白帝社 1961，増補校訂版：徳田政信編『増補校訂標準日本口語法』勉誠社 1977，同修訂版：1989）

三浦法子　1973「平安末期の受身表現についての一考察」『岡大国語国文論稿』1：129143

三上 章　1953『現代語法序説』乃江書院（くろしお出版復刊版 1972）

光信仁美　2001「直接対象受動文に関する一考察」東京外国語大学 日本課程・留学生課共編『東京外国語大学 日本語研究教育年報』5（2000年度版）：15-29.

三矢重松　1908『高等日本文法』明治書院.

南 不二男　1993『日本語文法の輪郭』大修館書店.

宮島達夫　1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.

宮島達夫　2005「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』70巻7号：6-33.

宮地幸一　1968「非情の受身表現考」『近代語研究 第二集』武蔵野書院：279-296.

村上三寿　1986「受身構造の文」言語学研究会編『ことばの科学1』むぎ書房：7-87.

村上三寿　1997「うけみ構造の文の意味的なタイプ」『ことばの科学8』むぎ書房：103-149.

ヤコブセン，ウェスリー M.　1989「他動性とプロトタイプ論」『日本語の新展開』くろしお出版（再録：須賀・早津(編)1995，166-178）

柳田征司　1989「助動詞「ユ」「ラユ」と「ル」「ラル」との関係」『奥村三雄享受退官記念国語学論叢』桜楓社（再録：1993『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院，717-740）

山田潔　1995「『玉塵抄』の中性動詞―「読ムル」の用法―」『国語国文』64-8.

山田敏弘　2001「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第7回 テモラウ受益文の使役的性質と受身的性質」『日本語学』20巻5号：102-112.

山田敏弘　2001「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第8回 事態の捉え方と直接構造・間接構造(1)」『日本語学』20巻6号：106-115.

山田博志　1997「中間構文について ～フランス語を中心に～」筑波大学現代言語学研究会(偏)『ヴォイスに関する比較言語学的研究』：97-131. 東京：三修社.

山田孝雄　1908『日本文法論』寶文館.

山田善郎(編)　1995『中級スペイン文法』白水社.

湯澤幸吉郎　1944『現代語法の諸問題』日本語教育振興会（復刻：『湯澤幸吉郎著作集3 現代語法の諸問題』勉誠社 1980）

鷲尾龍一　1997a「他動性とヴォイスの体系」中右 実編『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社出版.

鷲尾龍一　1997b「比較文法論の試み～ヴォイスの問題を中心に～」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』筑波大学現代言語学研究会 三修社：1-66.

鷲尾龍一　2003「言語比較の方法～言語理論をアジアから見ると何が見えるか～」東京言語研究所 夏期特別講座 2003年7月28日-30日 講義資料.

渡辺伸治　1999「「視点」諸概念の分類とその本質」『言語文化研究 25』大阪大学, pp.389-401.

Alarcos Llorach, Emilio 1994 La voz o diátesis. In *Gramática de la Lengua Española.* R.A.E., 141-142. Madrid, Espasa-Calpe.

Barber, E.J.W. 1975 Voice: Beyond the passive. In C. Cogen et al. (eds.) *Proceedings of the first annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 16-24. Berkeley, BLS.

Benveniste, E 1966 *Problèmes de Linguistique Générale.* Paris, Gallimard. （岸本通夫訳 1983『一般言語学の諸問題』みすず書房）

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan. 1999 *The Longman grammar of spoken and written English.* London: Longman.

Bubeník, Vít 1998 *A historical syntax of late middle Indo-Aryan.* Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

Croft, William. 1991 *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information.* Chicago, Chicago University Press.

Croft, William. 1994 Voice: Beyond Control and Affectedness. In B. Fox and P. J. Hopper (eds.). *Voice: Form and function*, 89-117. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

Dixon, R.M.W. 1979 Ergativity. In *Language* 55:59-138.

Dixon, R.M.W. 1991 *A New Approach to English Grammar, On Semantic Principles.* Oxford, Clarendon Press.

Fillmore, C.J., Kay, P. and O'Connor, M.C. 1988 Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of let alone. In *Language* 64, 501-538.

Gili y Gaya, Samuel [9]1964 *Curso Superior de Sintaxis Española* . Barcelona, Spes.

Givón, Talmy 1984 *Syntax: A Functional-Typological Introduction Vol. I* . Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago, University of Chicago Press. （河上誓作他訳 2001『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ』研究社出版）

Halliday, M. A. K. 1970 Language Structure and Language Function. In J. Lyons (ed.) *New Horizons in Linguistics*, 140-165. Great Britain, Penguin Books.

Hopper Paul J. and Thompson Sandra A. 1980 Transitivity in grammar and discourse. In *Language* 56:251-299.

Howard, Irwin & Agnes M. Niekawa-Howard 1976 Passivizatoin. in Shibatani, Masayoshi (ed.) *Syntax and Semantics Vol.5 Japanese Generative Grammar.* New York, Academic Press: 201-238.

Jacobsen, Wesley M. 1991 *The Transitive Structure of Events in Japanese* (Studies in Japanese Linguistics 1). Tokyo, Kurosio.

Jespersen, Otto 1924 *The Philosophy of Grammar.* Allen and Unwin. (半田一郎訳 1958『文法の原理』岩波書店)

Keenan, Edward. L. 1985 Passive in the world's languages. In T. Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description, Vol.1: Clause structure*, 243-281. Cambridge, Cambridge University Press.

Kemmer, Suzanne 1993 *The Middle Voice*. Amsterdam, Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins. Typological Studies in Language 23.

Kemmer, Suzanne 1994 Middle voice, transitivity, and the elaboration of events. In: B. Fox and P. J. Hopper (eds.). *Voice: Form and function*, 179-230. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

Kinsui, Satoshi 1997 The Influence of Translation on the Historical Development of the Japanese Passive Construction. In: *Journal of Pragmatics* Vol.28, No.5, 759-779.

Klaiman, Miriam. H. 1988 Affectedness and control: a typology of voice systems. In Shibatani, Masayoshi (ed.) *Passive and Voice*, 25-83. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

Klaiman, Miriam. H. 1991 *Grammatical Voice*. New York, Cambridge University Press.

Kuno, Susumu. 1990 Passivization and Thematization. In Kamada, Osamu & Wesley M. Jacobsen (eds.), *On Japanese and How to Teach It: Honor to Seiichi Makino*, 43-66. Tokyo: The Japan Times.

Kuno, S. & E. Kaburaki. 1977 Empathy and Syntax. In *Linguistic Inquiry* 8, 627-672.

Kuroda Shige-Yuki 1979 On Japanese Passives. In Bedell, G. et al (eds.) *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, 305-347. Tokyo, Kenkyusha. (Reprinted: *Japanese Syntax and Semantics: collected papers*, Kluwer Academic Publishers. 1992)

Langacker, R. W. 1987 *Foundations of Cognitive Grammer*. Vol.1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford, Cal.: Stanford University Press.

Langacker, R. W. 1990 *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin, Mouton de Gruyter

Levin, Beth 1993 *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago, The University of Chicago Press.

Levin, Beth & Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax semantics Interface*. London Cambridge, Mass. MIT Press.

Lyons, John 1969 *Introduction to Theoretical Linguistics*. London, Cambridge University Press（國広哲彌(監)1973『理論言語学』大修館書店）

Mathesius, V. 1928 On linguistic characterology with illustrations from Modern English. Republished in: J. Vachek (ed.) (1964) *A Prague School Reader in Linguistics,* 59-67. Bloomington: Indiana University Press.

Mendikoetxea, Amaya. 1999. Construcciones inacusativas y pasivas. In Ignacio Bosque y Violeta Demonte (eds.) *Vol. 2 de Gramática descriptiva de la lengua española. 3 vols,* 1574-1629. *Colección Nebrija y Bello*, Madrid, Espasa Calpe.

Otero, Carlos Peregrín. 1999 Pronombres Reflexivos y Recíprocos. In Ignacio Bosque y Violeta Demonte (eds.) *Vol. 1 de Gramática descriptiva de la lengua española.*

3 vols, 1427-1517. *Colección Nebrija y Bello*, Madrid, Espasa Calpe.

Perlmutter, D. 1971 *Deep and Surface Structure Constraints in Syntax*. New York: Holt, Rinehart and Winston

Perlmutter, D. 1978 Impersonal passive and the Unaccusative Hypothesis. In *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 157-189. Berkeley Linguistics Society, University of California, Berkeley.

Shibatani, M. 1985 Passive and related constructions: A prototype analysis. In *Language* 61-4, 821-848.

Shibatani, Masayoshi. 1998 Voice Parameters. In Leonid Kulikov & Heinz Vater (eds) Typology of Verbal Categories—Papers presented to Vladimir Nadjalkov on the occasion of his 70th birthday, 117-138. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Svartvik, J. 1966 *On voice in the English verb.* The Hague: Mouton.

Tesnière, Lucien 1965 *Éléments de syntaxe structurale; préface de Jean Fourquet*, 2e ed., rev. et corr. Paris : Klincksieck.

Trask, R. L. 1979 On the Origins of Ergativity. In F. Plank (ed.) *Ergativity—Towards a Theory of Grammatical Relations*, 385-404. London, Academic Press.

Tsuboi, Eijiro 2000 Cognitive Models in Transitive Construal in Japanese Adversative Passive. In Foolen, A. & van der Leek, F. (eds.) *Constructions in Cognitibe Linguistics*, 283-300. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

Wierzbicka, Anna 1979 Are Grammatical Categories Vague or Polysemous? (The Japanese 'Adversative' Passive in a Typological Context.). In *Papers in Linguistics* Vol.12, No.1/2. (Repeinted: "The Japanese 'adversative passive' in a typological context (Are grammatical categories vague or multiply polysemous?) " Wierzbicka 1988, 257-292)

Wierzbicka, Anna 1988 *The Semantics of Grammar*. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

辞書・辞典類

白水社（1999）『現代スペイン語辞典（改訂版）』宮城 昇／山田善郎監修